

中国のほんの話(57)

「紅衛兵」の重い歴史を背負ってきた私

～ 回族の作家・張承志 ～

蔭山 達弥

「1960年前後、中国は全国にわたって三年に及ぶ恐るべき飢饉に見舞われた。飢饉は、首都北京にも容赦なく襲いかかった。学校では体育の時間がなくなり、授業も最低限まで圧縮された。人々はみな、肉のようでもあり、凍ったあとでとけて柔らかくなった果物のようでもある代用食を食べた。私が通っていた北京第六一中学では、友だちが持ってくる弁当でいちばん贅沢なのが煮た大豆だった。どの家でも簡単な秤を作り、一人分ずつの主食を計ってそれぞれが別に煮て食べた。おとなは自分の分をへすって子どもたちに少しでも多く食べさせようとした。母は、栄養失調でからだ中にむくみが出た。」(張承志『紅衛兵の時代』岩波新書赤222)

張承志(Zhang Cheng zhi)は、1948年、北京の回族(中国の少数民族の一つ、人口は700万人前後、寧夏回族自治区及び西北地方に比較的多く住む)の家に生まれた。イスラム名は、アラビア語で幸いな者を意味するサイド。原籍は山東省済南であるが、張承志自身は北京で生まれ、育った。張承志の家は五人家族だった。母と三人の子どものほかに、母方の祖母がいた。父はずっと前に亡くなった。張承志の子ども時代は貧しかった。しかし、張承志姉弟は食べ物や着るものに不平を言わず、ひたすら勉学に努めた。1964年、張承志は、当時の北京で指折りの名門校、清華大学付属中学から、高級中学(高校)への合格通知を受け取る。

1966年5月以降、学校を含めた中国社会全体で、文化大革命の第一歩である「三家村」批判の政治運動が始まった。清華付属中の党支部は全校の「三家村」批判を指導した。張承志は小グループを作り、最初の小字報(小型の壁新聞)を貼り出すさい、この小グループに名前をつけることにした。張承志が思いついたいくつかの名のなかに「紅衛兵」の名が含まれていた。1966年5月29日、円明園に仲間が集まり、清華付属中紅衛兵が誕生した。この日から「紅衛兵」の三文字は張承志個人のもではなくなった。

「大きな動乱の中では、人は残酷になる。この道理を理解するのに、私は多くの時を必要とした。しかし、人の心理は何本もの細い麻で編まれたひとすじの縄のようなもので、心に一種の刺激を受けると一本の細い麻はすぐ切れてしまう。人は何も言わないが、心中の傷は決して癒えることはない。」(『紅衛兵の時代』)1968年6月末、武闘(文化大革命における大衆組織間



の暴力)と冷戦の末に、学校から撤退したあと、張承志は内モンゴルのハンウラ草原に行き、その地の人民公社の一牧民になり、四年間を過ごした。「私自身についていえば、モンゴルの草原で暮らしてからというものは、一般大衆の身分、最低の社会的地位、何ひとつ持たない経済条件に身を置いて中国と接触し、観察する習慣ができた。」(『紅衛兵の時代』)1972年、張承志はハンウラ草原の牧民に推されて、北京大学の歴史学部に入學、考古学を専攻する。

張承志の作家としてのデビューは、1978年、三十歳のときである。1981年、張承志はハンウラ草原を十年ぶりに再訪する。初期の代表作『黒駿馬』(岸陽子訳、早稲田大学出版部1994)は、文学に関する勉強の最初の試みとして、あるいは遊牧民としての生活体験の成果として世に問うた作品である。この作品はその年の全国優秀中篇小説賞を受賞した。

「姿りりしく翔りゆく わがガンガ・ハラ(黒駿馬)よ 繋がれているあの門辺 あの榆の木の中に」1970年か71年のある冬の午後、会議に参加していた張承志の耳に「ガンガ・ハラ(綺麗な黒い毛並みの馬)」という言葉が流れてきた。張承志はその瞬間からこの古い歌詞に心魅かれ、毎日のように、近くのゲルにもぐりこみ、年寄りに頼んで、お茶をすすりながら、この歌の歌詞を一語一句と確かめ続けた。「深夜の平原を、心ゆくまでこの歌を歌いながら、独り、馬の背に揺られて疾駆するとき、私は、この古歌によってこころの奥底まで洗い清められるような気がした。」(張承志『日本の読者の皆さんへ』、『黒駿馬』所収)内モンゴルの草原で子を産み、育てるエジ(母の呼称)たちの人生に、張承志は人間が生きることの原型を見出し、彼女たちに愛をこめて『黒駿馬』を描いたのである。

かげやま たつや(教授・中国文学)